

コロナ禍における外国人留学生の不安に関する 縦断的研究

—PAC 分析による不安の変化に注目して—

許 明 子

要 旨

本研究は、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の影響が長期化している中、外国人留学生がどのような「不安」を感じているか、またその「不安」がどのように変化しているかを明らかにすることを目的としている。「不安」に関する研究は心理学や精神医学等の様々な観点で行われてきているが、本研究では教育心理学の観点から、「自己を脅かす可能性のある破局や危険などのリスクを予想する感情」として定義し（吉村 2017）、2021年4月から2023年4月までの間に3回にわたって文系大学院に在学している中国人留学生3名を対象にPAC分析を行い、不安の変化に注目して分析を行った。

注目すべき結果は、修士課程が修了した後の3回目の調査でも一人暮らしに対する不安、新生活や新たな挑戦に対する不安を示すクラスターが出現したことである。COVID-19の影響を受けて日本社会への適応や人間関係の構築のプロセスが十分に経験できなかったことから、留学生活が進んでいる中で新入生が抱えているような不安を感じ続けていることが明らかになった。外国人留学生が抱えている不安の形が明確になったことから、教育現場でどのような支援が必要なのか検討を行い、適切な対策を取る必要があると主張する。

キーワード

留学生の不安、PAC分析、クラスター分析、縦断的調査、COVID-19

1. はじめに

2021年度から新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の世界的

な流行により、日本の教育現場では様々な影響を受けてきた。日本の大学生はコロナ禍で学習と生活の両面において様々な困難に直面しながら勉学を継続していることが報告されている（濱名 2021）。外国人留学生も日本人学生同様、学習面、生活面で困難に直面し、様々な不安を抱えているが、外国人留学生ならではの不安も存在している。許ほか（2022）では、コロナ禍で移動が制限されたことによる外国人留学生の不安を明らかにしているが、未渡航による不安やオンラインによる遠隔授業、人との交流ができないことによる孤立等、複雑な状況に置かれていることが報告されている。

「不安」に関する研究は心理学や精神医学等の様々な観点で行われてきている。本研究では教育心理学の観点から不安の概念をまとめた吉村（2017：10）に従い、「不安」とは「自己を脅かす可能性のある破局や危険などのリスクを予想する感情」であると定義する。不安は恐怖や心配等の感情を含み、個人の発達や社会生活等の面で人間にとって不可欠な感情であるが、COVID-19の影響の長期化に伴い、外国人留学生の不安も様々な形で表出し変化していると考えられる。

昨今はその影響が落ち着きつつあるが、外国人留学生の「不安」の状態はまだ続いており、今後も何かしら影響が続くものと予想される。そこで、本研究では COVID-19による外国人留学生の不安について分析を行った許ほか（2022、2023）の研究結果を発展させて、COVID-19の長期化に伴う外国人留学生の不安の変化について3年間の縦断的調査を通して分析を行う。

本研究では2021年4月から2023年4月までの2年間3回にわたって、文系大学院に在学している中国人留学生3名を対象にPAC分析を行い、不安の変化に注目して考察を行った。COVID-19の影響による外国人留学生の不安の変化と問題点を可視化することによって、日本語教育現場でどのような支援が必要なのかについて提案したい。さらに、今後も生じ得る外国人留学生の孤立や留学生活の不適應等の問題についても検討を行い、どのような予防策が施せるかについても検討を行いたい。

本研究の構成は、2章で不安やPAC分析に関する先行研究を概観し、3章で調査概要について述べた後、4章で考察を行う。5章では本研究のまとめと意義および展望について述べる。

2. 先行研究

2.1 留学生の不安に関する研究

留学生の不安に関する先行研究は、経済的な面、異文化適応に関する問題、人間関係や進路等多岐にわたる問題が取り上げられている。従来の先行研究を大きく二分すると、日本に滞在している留学生が抱えるストレス・心理的葛藤という一時点の心理的状态の立場を捉えようとするものと、異文化適応における困難を捉えようとするものの二つの方向性がある。前者は不安の実態、起因、影響等を検討する研究であり（平瀬・草野 2004、久野 2011、許・松田 2016等）、後者は不安を含め、より広い視点から異文化適応の過程で見られるあらゆる事象を取り上げる研究である（田中ほか 2012、殷・青木 2017等）。これらの研究は留学生が感じるストレス、葛藤等に関する不安を解明した点で成果を上げていると言えるが、留学期間を通して変化している不安の実態を捉えたものは管見の限り見当たらない。

COVID-19の影響に注目し、学生の不安について分析した研究に高久（2021）、濱名（2021）がある。高久（2021）はCOVID-19の影響によってオンラインで授業が開講されるようになり、留学生の不安と人間関係の構築への支援の重要性を述べている。濱名（2021）は、日本の大学の1245名の在学学生を対象に、授業方式に対する評価や不安、成績と授業の理解度、生活意識の変化等の項目についてアンケート調査を実施した。その結果、学生は学習と生活の両面で様々な困難に直面しながら勉学していることを明らかにし、安全面のみならず、悩み相談や十分な交流等の支援策が大学側に強く求められると指摘している。

これらの研究の調査方法としては、質問紙調査やインタビュー調査、KJ法によるものがほとんどである。既存の尺度や事前に項目が定められ

たアンケートを利用したり、悩み相談の文書をデータとして使用したりしており、いわゆる量的な手法で不安を考察しているものが多い。不安は留学生が置かれた状況や環境によるもので、個人レベルで質的な分析が必要であるが、質的分析を行ったものは少ない。

本研究では、COVID-19の影響によりもたらされた留学生の様々な心配や危惧を解明し、適切な支援を行うことを目的としている。そのためには留学生の不安に関する質的な研究が急務であると考えられる。したがって、本研究では深堀（2007）の不安の定義に基づいてPAC分析で語られた留学生の不安の解明を目指す。

2. 2 PAC分析に関する研究

PAC分析（個人別態度構造分析：Analysis of Personal Attitude Construct）は個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である（内藤2002）。インタビューデータの分析によって作成されたデンドログラムとクラスターの分析を通して留学生個人の不安が留学生全体の不安にどのように解釈できるかを捉えている。許（2022）では文系の大学院に在籍している外国人留学生（日本に滞在している在留グループと来日できていない未渡航グループ）を対象にCOVID-19による影響についてPAC分析の手法を援用してインタビュー調査を実施し、分析を行った。特に文系の大学院生は実験や実習等の対面授業がほとんど実施されておらず、文系の大学院生特融の心理的不安を抱えていることを明らかにした。未渡航グループではオンライン授業による資料入手の困難さや人間関係の希薄さから研究面や将来の進路に関する不安が大きく、留学生活に適應できるかどうかに関する心配や不安から、1学期間在学しているにも関わらず新入生のような不安を抱えていることが明らかになった。一方、日本在留グループには日本国内に滞在していながらも孤立感、健康面・日本での日常生活への不適應等の不安が存在していることが分かった。外国人留学生の孤立は大学院における研究活動だけではなく、将来の進路やキャリア形成の不安につながっており、早急な対策や支援が必要であると述べている。

また許ほか(2023)では、未渡航グループを対象に追跡調査を行い、COVID-19の長期化に伴う影響について分析を行った。その結果、修士課程2年次に在籍しているにも関わらず、留学生活への適応や一人暮らしに対する不安を示すクラスターが生成されていた。COVID-19の影響の長期化が留学生活や勉学、研究活動に大きな影響を与えていることが明らかになった。

本研究は許ほか(2022、2023)の研究成果を発展させるものとして、未渡航グループの留学生を対象にどのような不安を感じているかについて2年間にわたって3回の追跡調査を実施した結果について分析を行う。未渡航グループの留学生の不安が渡日や留学生活の経過とともにどのように変化しているのか、COVID-19が研究活動や留学生活にどのような影響を与えているのかについて縦断的に実施した調査結果について分析を行う。

3. 調査概要

3. 1 調査対象者及び調査時期

調査対象者の3名の被験者は2021年4月にオンラインで大学院に入学し、未渡航のまま1年間全ての授業をオンラインで受講しながら研究活動を行っていた。その後、2022年4月～5月に来日し、2022年度は修士論文を執筆、2023年3月に修士課程を修了した。3名とも2023年4月に博士後期課程に進学し、現在は博士後期課程1年次に在学している。

3回の縦断調査はPAC分析の手法を取り入れて、2年の間に被験者が節目を迎えた時点で実施し、COVID-19の影響を受けてどのような不安を感じているかという刺激文を与えてインタビュー調査を行った。1回目の調査は修士課程1年次の春学期をオンラインで終了した2021年8月、2回目の調査は1回目の調査から1年経過した2022年8月(来日後3カ月経過)、3回目の調査は修士課程修了後博士後期課程に進学した直後の2023年4月に実施した。

調査はZoom上でリモートコントロール機能を活用して実施した。データ収集はPAC-Assist2を用い、クラスター分析(ワード法)にはRを

用いた。調査実施の手続きは刺激文に対する自由連想と重要度判定、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告の順に行った。デンドログラムの解釈及びインタビューは被験者の母語である中国語で実施し、日本語に翻訳して考察を行った。

調査対象者の属性を表1にまとめ、調査時期と対象者の勉学状況を表2にまとめた。

表1 調査対象者の属性

	性別	日本語能力	1回目調査時の留學歴
被験者1	女	N1	満10ヶ月
被験者2	女	N1	満2ヶ月
被験者3	女	N1	満2ヶ月

表2 調査時期と勉学状況

	時期	調査実施時の勉学状況
1回目の調査	2021年8月	オンラインで入学後4カ月経過 オンラインのみで春学期終了
2回目の調査	2022年8月	1回目調査実施1年後、渡日後3カ月経過 修士課程2年次在学、修士論文執筆中
3回目の調査	2023年4月	オンラインで入学後2年経過、修士課程修了 博士後期課程に進学

1回目の調査を実施した時点（2021年8月）で3名ともに来日できない状況で同年4月にオンラインで大学院に入学し、入学後も来日できず中国に滞在しながらオンラインで大学院の授業を履修していた。その後、2022年4月から5月にかけて来日し、日本に滞在しながら研究活動を行うようになった。2回目の調査は1回目調査の1年後に実施したが、来日後3カ月が経過し修士課程2年次の春学期が終了した時点であり、修士論文を執筆している時期であった。3回目の調査はオンラインで入学した2年後に当たるが、修士課程を修了し、博士後期課程に進学した直後であった。

このように、1回目から3回目の調査はCOVID-19の影響を受けながらも研究活動の節目に当たる時期に実施しており、留学生の不安がどのように変化しているかが観察できるように調査計画を設計した。未渡航グループの来日前と来日後の不安の変化については許ほか（2023）で、COVID-19による健康面の不安や異文化の適応に対する不安、さらに研究活動に対する不安が複雑に関係している様子が詳細に述べられている。本研究では2年間3回の縦断的な調査結果についてマクロな観点で分析を行う。

3. 2 調査方法

3. 2. 1 倫理的配慮

被験者の3名に対して口頭で実験について説明したうえで、研究説明の文書のファイルを送った。そして、研究結果を学会で発表する、もしくは研究論文として投稿する旨を伝え、全員から了承を得た。また、インタビューにおいては、話したくないことは話さなくて結構であること、いつでも中断できること、中断しても何ら不利益を被ることはないことを伝えた。インタビュー調査は対象者の母語である中国語で実施し、それを日本語に翻訳して分析を行った。

3. 2. 2 手続き

3名の被験者に対して、すべてオンラインで調査を行った。手続きの詳細は、以下の通りである。

(1) 刺激文に対する自由連想と重要度判定

刺激文を提示したうえで、Zoomのリモートコントロールを活用し、被験者に自由連想の項目と重要度を記入してもらった。連想している間、被験者にプレッシャーをかけることを防止するために、実験者はカメラをオフにした。刺激文を以下に示す。

【提示刺激文】（1回目の調査）：「あなたは、コロナの影響で来日できていないが、現在の留学生活について、不安に思うことや、心配になる

ことはありますか。どんなことですか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、キーワード、またはフレーズや文の形で、思い浮かんだ順に「自由連想語（文）」のところにご入力ください。」

【提示刺激文】（2回目の調査）：「あなたは、コロナの影響で、遅れて来日していますが、現在の留学生活について、不安に思うことや、心配になることはありますか。どんなことですか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、キーワード、またはフレーズや文の形で、思い浮かんだ順に「自由連想語（文）」のところにご入力ください。」

【提示刺激文】（3回目の調査）：「あなたは、大学院に入学するとき、在学中にコロナの影響を受けていました。今月、修士課程を修了しますが、現在の留学生活について不安に思うことや、心配になることはありますか。どんなことですか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、キーワード、またはフレーズや文の形で、思い浮かんだ順に「自由連想語（文）」のところにご入力ください。」

（2）連想項目間の類似度評定

類似度評定を説明したうえで、Zoomのリモートコントロールを活用し、被験者に類似度を評定するよう依頼した。評定のプロセスでは、被験者にプレッシャーを与えないように、実験者はカメラをオフにした。

（3）類似度距離行列によるクラスター分析

調査者は、類似度評定によって得られたデータを分析ソフトRにかけてクラスター分析（ウォード法）を行った。

（4）被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告

クラスター分析によって作成されたデンドログラム（樹形図）を見せながら被験者の母語である中国語でインタビューを行った。インタビューの際にはZoomミーティングの拡張機能を利用してデンドログラムの解釈および不安について述べてもらった。

インタビュー調査のデータ分析の一例を図1で示す。

ライン番号	話者	発言内容	被験者①	
			日本語訳	
1	INT	<p>然后那根据你刚才的这个回答，然后我们重新做了这样子的一个相关的一个表，然后一共的话是有这样子11个。这个这个联想到的联想词，那它们之间的关联的话就会这样的表，那可能需要先让你来看一下，这个，每个关联词之间的话，在你看来它们可能会不会可以分成一个组。</p> <p>首先让我们来看一下下面的这个，其实可以看到这里整个分成了三大组，然后一共是1234566个小组这样子，那首先第一个，像这样子31110跟8的话，它们这个是一个大组，在你看来，是分成一个大组比较好呢，还是分成两个小组比较好呢。</p>	<p>では、先ほどの回答をもとに、このような関連連表を作りましたところ、このように関連語が全部で11個あり、それらの関係はこのようになり、このような形になります。これ、あなたの意見では、それぞれの相關語間の単語、それらがグループに分けることができるかどうかです。上のものを見てみましょう。劇断には、大きく3つのグループに分かれていることがわかります。そして、合計で1234566のグループがあります。最初のグループは31110のようになっています。次に8から大きなグループです。あなたの意見では、それらを1つの大きなグループに分けた方がよいですか、それとも2つのグループに分けた方がよいですか。</p>	
2	ANO1	<p>嗯，一个大组比较好吧。</p>	<p>まあ、大きなグループの方がいいです。</p>	
3	INT	<p>好，一个大组，把它们分成一个组，那紧接着第二个的话，是单独的一组，这个应该是OK的对吧。</p>	<p>よし、大きなグループ、それらをグループに入れます。2つ目が続いたら別グループだし、これでいいんじゃない？</p>	
4	ANO1	<p>嗯，就2和5吗，对。</p>	<p>ええと、2と5だけですか。</p>	
5	ANO1	<p>好，呃呢？刚刚不是可以怎么突然不能离了。这个。</p>	<p>それは悪いです。</p>	
6	INT	<p>然后，那紧接着这个7和9的话，它下面的这个3是可以分成1组的吗？还是觉得它们两个单独是一组比较好。</p>	<p>では、7と9に続いたら、次の3でグループに分けることができるでしょうか？グループとしては、やはり二つの方がいいと思います。</p>	
7	ANO1	<p>嗯，可能单独是一组会更好一点。</p>	<p>まあ、一つのグループの方がいいかもしれません。</p>	
8	INT	<p>好的，好的。然后那个那个单独的费用的话，可以跟底下的一人暮らし、研究、卒業できるかどうか。这个分成一组，还是他们单独是一组比较好？</p>	<p>わかったでは、留学費用については、下のたそがれ、研究、卒業できるかどうか、それとも一つでまとめたほうがいいのでしょうか。</p>	
9	ANO1	<p>嗯，可能单独是一组会更好一些。</p>	<p>まあ、一つのグループの方がいいかもしれません。</p>	
10	INT	<p>好的，那最后的话，这个，这个他们两个就是一组。(对对对)就可以，那所以我们可以像这样分为5组。</p> <p>那首先的话我会根据每个小组内部的话，我可能先要去问一下，那就是首先第一大组的话，它里面有这样的小点，那关于这4个的话，比如说每个词你可以就关于你的一些想法呀，或者说你对它的一些印象的话你可以告诉我一下吗？</p>	<p>わかったこのように3つのグループに分けることができます。まず、各グループの内部単語に基づいて質問します。つまり、まず、最初の大きなグループには、そのように4つの小さなポイントがあり、これらの4つの単語について、たとえば、すべての項目についての感想を教えてください。</p>	

図1 インタビュー調査のデータ分析の例

4. 不安に関する分析結果

1回目から3回目までのクラスターを分析した結果、研究活動に対する不安は3回の調査を通して継続的に出現していたが、クラスターに対する語りから不安の様相が変化していることが分かった。1回目の調査では主にオンライン環境による教育活動・研究活動・学業に対する不安が中心であり、資料入手の困難、ネット環境、オンラインによる研究活動のクラスターが出現していた。2回目の調査では来日後の環境の変化に伴う不安が出現しており、異文化環境における人間関係への不安、外国人としての対人関係構築への不安、一人暮らしへの不安、生活に必要な諸手続きへの不安が出現していた。3回目の調査では博士後期課程への進学に伴う研究活動に対する不安、人間関係構築への不安、新生活と将来に対する不安が出現していた。

注目すべき点は、3回目の調査を実施した時点でも一人暮らしに対する不安、新生活や新たな挑戦に対する不安を示すクラスターが生成されていることである。被験者の語りから、特に一人暮らしに対する不安を強く感じており、新入生が持つような不安を感じていることが分かった。大学院に入学して3年目を迎えているものの、COVID-19の影響を受けて日本社

会への適応や人間関係の構築のプロセスが十分に経験できなかったことから、滞在期間は経過しても新入生のような不安を感じているのではないかと思われる。

調査の結果について、被験者1から被験者3の順に各被験者のインタビューに基づいて作成したデンドログラムとクラスターを図で示し、各クラスターの解釈について注目すべきところを中心に考察する。

4. 1 被験者1の不安の変化

まず、被験者1の3回のデンドログラムを図2、図3、図4で示す。図2は1回目の調査結果、図3は2回目の調査結果、図4は3回目の調査結果のデンドログラムである。

被験者1の不安は、1回目の調査のデンドログラムのCL6の「日本社会の集団に帰属するという期待」が2回目の調査のデンドログラムのCL1「異文化環境における人間関係の処理への不安」とCL5の「新しい環境における生活・勉強・研究への不安」に変化している。さらにその不安が3回目の調査ではCL2の「人間関係の構築に対する不安」に変化している

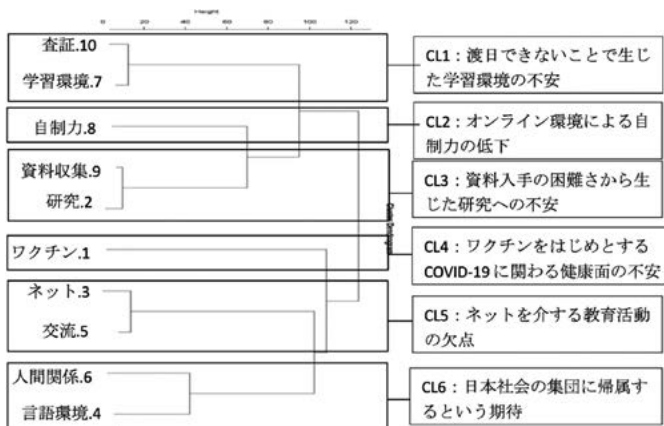


図2 被験者1の1回目調査のデンドログラム

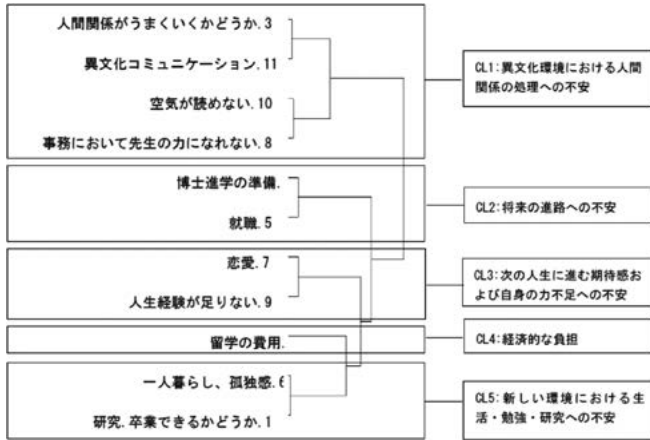


図3 被験者1の2回目調査のデンドログラム

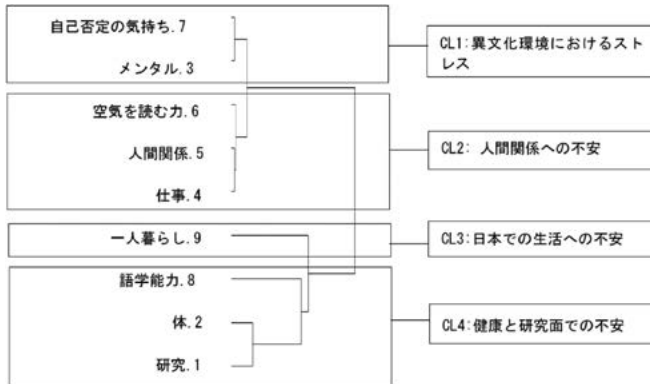


図4 被験者1の3回目調査のデンドログラム

ことが分かる。来日後に実施した2回目と3回目の調査には一人暮らしに対する不安が表れているが、日本での生活のために必要な様々な手続きや初めての一人暮らしに対する不安が語られていた。この一人暮らしに対する不安は留学生活が経過しても解消されず、3回目の調査でもCL3の「一人暮らしに対する不安」が生成されており、その不安が留学生活全般に影響

響している可能性を示唆している。被験者 1 の不安の変化の特徴は次の 3 つにまとめられる。

- ① 修士課程を修了したにも関わらず、自分自身の自信付けにはつながらず、学業に関連する連想項目、特に語学能力等のように不安が具体的な語りとして表れている。
- ② 日本社会に属している中で人間関係の構築に対する不安があり、連想項目の中に「空気を読む力」の欠如から生じた不安が表れている。人間関係への不安がメンタルにも影響を及ぼしている。
- ③ 一人暮らしに対する不安は孤独感から、日常生活における種々の手続きに変わっている。

以上のように被験者 1 は大学院に入学して 2 年が経過した 3 回目の調査でも新入生が抱くような漠然とした不安を感じていることが分かった。2 回目と 3 回目の調査で研究に対する不安が最も大きくなっているが、一人暮らし、人間関係、語学能力に対する不安が表れており、留学生活全般について不安を抱えていることが分かる。本来であれば大学院に入学してから様々な経験を通して日本での留学生活に適応していけようが、COVID-19 の影響で来日が遅れたことや他人との接触経験が乏しいこと等から不安が解消されずに残っているのではないかと思われる。

4. 2 被験者 2 の不安の変化

被験者 2 の調査結果を次の図 5、図 6、図 7 で示す。図 5 は 1 回目の調査結果、図 6 は 2 回目の調査結果、図 7 は 3 回目の調査結果のデンドログラムである。

被験者 2 の来日前の不安は、図 5 で分かるように研究活動に関するものが中心であり、すべてのクラスターが研究活動に関するものであった。そのような不安は来日後に改善できるという期待を持っていたが、来日後すべての難関を自分で解決しなくてはならなかったため、そこからまた新しい不安を持つようになった。来日前の図 5 の CL3 「研究活動に対する不

安」は来日後に実施した2回目の調査では図6のCL1「一人暮らしにおける勉強・研究への不安」とCL3「外国人としての人間関係の構築への不安」に変化して表出されていた。3回目の調査でも研究活動に対する不安が続

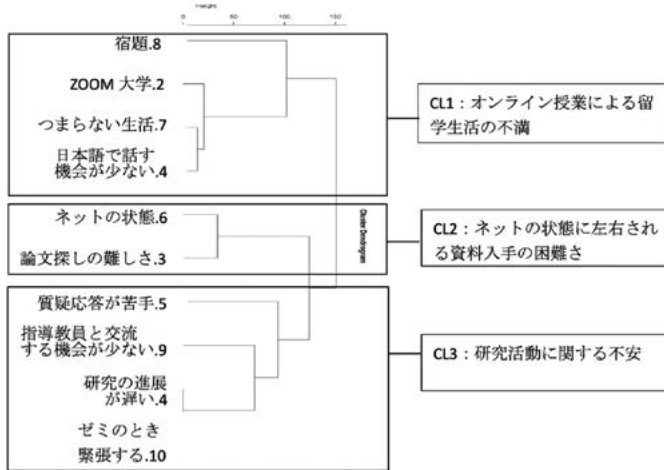


図5 被験者2の1回目調査のデンドログラム

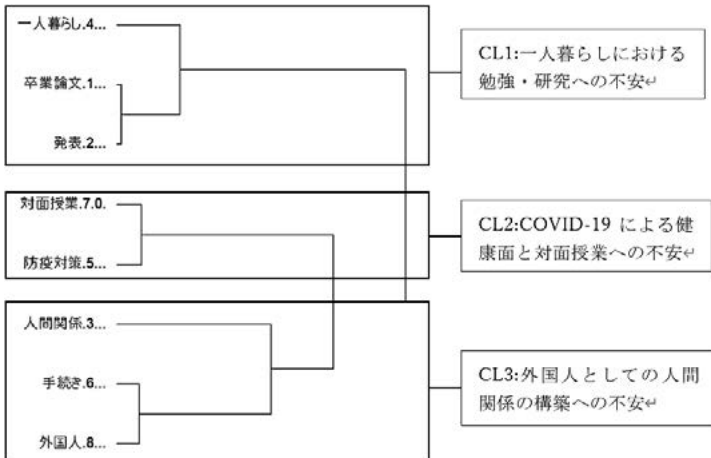


図6 被験者2の2回目調査のデンドログラム

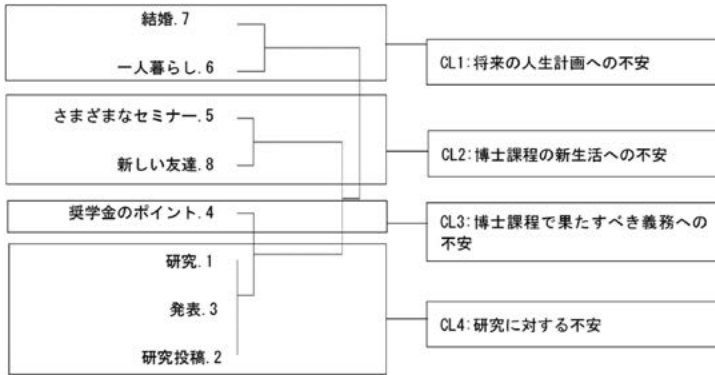


図7 被験者2の3回目調査のデンドログラム

いており、図7のCL2の新生活で新たな挑戦に対する不安やCL3の博士後期課程で果たすべき義務への不安、CL4の研究に対する不安につながっていた。調査後のインタビューでは、来日前の研究への不安が来日後に変わると期待したものの、一人暮らしの環境において、より不安に変わってしまったと語っていた。また、外国人という身分による人間関係の構築の困難さからも不安につながっていたことが分かる。

被験者2の不安の変化の特徴は次の3つにまとめられる。

- ①人間関係の構築への不安はほぼ解消されているが、その代わりに、新生活において新しい人との出会いへの期待感が高まっている。
- ②研究に対する不安はより具体的になり、現在抱えている不安の大部分は研究からのものである。例えば、新しい友達がなかなかできないということからの不安も、日本にいるものの日本人の友達がいないことにより、語学能力を上げることができないからである。
- ③一人暮らしにおいて、孤独感から抜け出し、慣れてきている。しかし、将来の生活との葛藤から不安が生じている。

被験者2は1回目から3回目の調査すべてにおいて研究活動に対する不安を示すクラスターが生成されており、インタビューでも研究に関連する連想項目が語られていた。1回目の調査ではCOVID-19の影響で未渡航の

状態であり、それに関連する連想項目が多かったが、2回目と3回目の調査では大学院における研究活動に対する不安に変化しており、日本での留学生活に適応しようとしている様子が伺える。

4. 3 被験者3の不安の変化

被験者3のデンドログラムを次の図8、図9、図10で示す。図8は1回目の調査結果、図9は2回目の調査結果、図10は3回目の調査結果のデンドログラムである。

被験者3は来日前の不安が来日後にも続いており、被験者の語りからも不安が解消されていないことが分かった。図8のCL2「渡日後の人間関係の構築への不安」が来日後には図9のCL3「アルバイトにおけるコミュニケーション上の不安」につながっている。被験者3の語りで述べていた「アルバイト」とは学内におけるTA活動を指すものであり、授業担当教員との人間関係やTA活動の内容に関する不安が研究活動の不安として表出されている。

さらに、図8の1回目の調査でCL4「学業に対する不安と将来への影響」が図9の2回目の調査でCL2「学業に関する不安」として表れており、

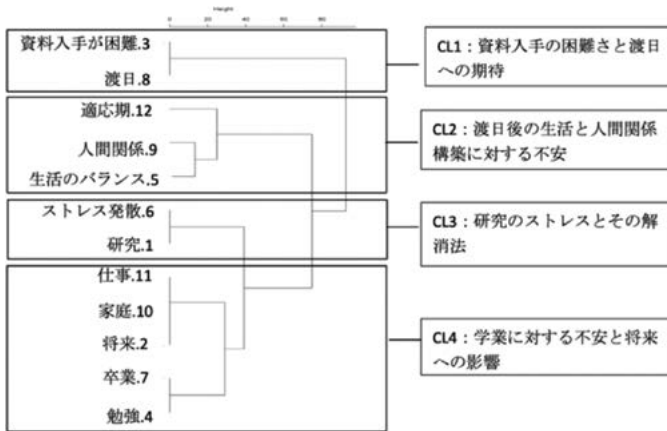


図8 被験者3の1回目調査のデンドログラム

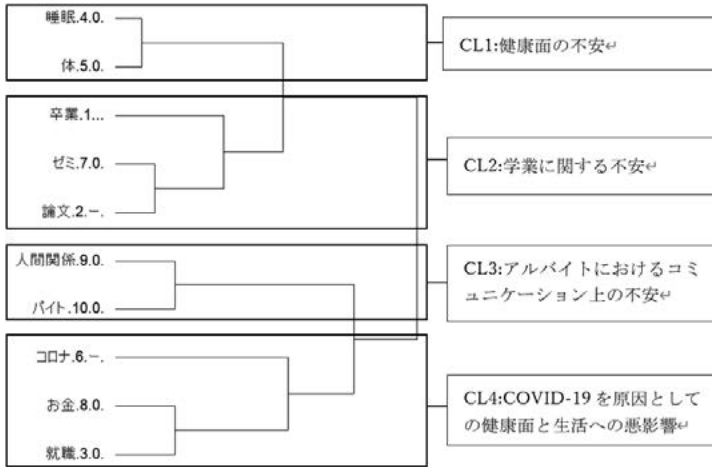


図9 被験者3の2回目調査のデンドログラム

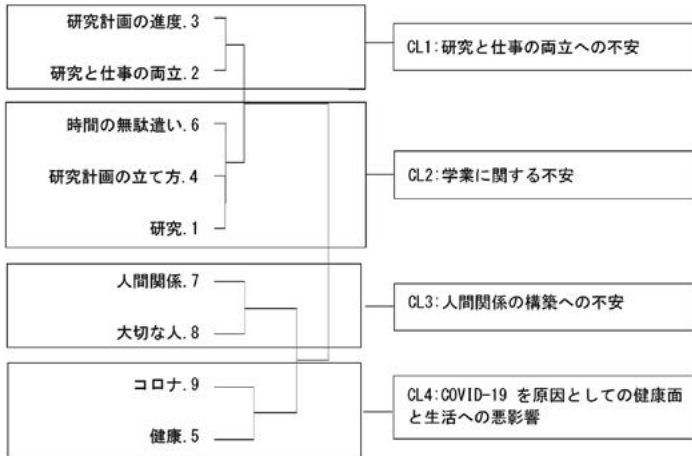


図10 被験者3の3回目調査のデンドログラム

来日後の適応期をうまく乗り越えられるか、人間関係をうまく処理できるかという不安が変わっている。人間関係構築に対する不安は3回目の調査でも表れており、図10のCL1、CL2の研究への不安と関連して生成され

ている。被験者3の不安の変化を次の3つにまとめられる。

- ①健康とコロナへの不安がまだ残っている。
- ②研究に対する不安は研究自体に対するものではなく、TAとしての大学での勤務との両立からのものとなり、不安の内容が具体的なものに変化している。
- ③人間関係の構築はより身近な人との関係になり、前回と比べれば、より落ち着いてきたように見える。

被験者3の不安は1回目と2回目の調査ではCOVID-19と関連して人間関係の構築に対するもので漠然とした連想項目として表れていたが、3回目の調査では不安の内容が具体的な連想項目として語られている。つまり、来日前は日本社会への適応や人間関係の構築に対する漠然な不安を感じていたが、来日後は学業やTA活動に自信をもって取り組めるか等の具体的な活動に対する不安に変化している。CL4の健康面の不安を感じつつも、大学院生として学業や留学生活に対する不安に変化しており、徐々に留学生活に適応しているのではないかと考えられる。

次章で3回の縦断的調査を通して明確になった外国人留学生の不安の変化の特徴と支援について述べる。

5. 縦断的調査から見られる不安の変化と支援

本章では2年間にわたる3回の縦断的調査の分析から明らかになった不安の変化及び特徴について考察する。さらに、外国人留学生にどのような支援が必要なのかについて述べる。

3名の被験者の語りから明らかになったことは、COVID-19によるマイナスの影響が徐々に軽減され、時間の経過とともに前向きに捉え直そうとしている点である。1回目の調査では来日できないことやオンラインによる授業、研究活動の制限から生じる不安が留学生活全般において漠然とした不安として表れていた。来日後に実施した2回目の調査では徐々に感染症に対する不安が和らぎ、日本での留学生活に対する不安はあるものの、それぞれの立場で前向きに捉えようとしていた。一方、2回目の調査から

は来日に伴う日本での留學生活に対する新たな不安が生じていることが分かった。例えば、来日後に一人暮らしを始めたことによる生活面の不安や、日本社会への適応に対する不安、大学院における研究活動、人間関係の構築に対する不安はさらに大きくなる等の変化が見られた。

以上の不安の変化と特徴について3つの観点から述べ、それに対する支援策について提案する。

一つ目は、3回の調査を通して不安は様々な形で表れているが、徐々に前向きに捉えようとする変化が見られるようになっていたことである。1回目の調査では漠然とした不安や来日できないことによるマイナスの不安が多かったが、2回目、3回目の調査では全体的に漠然とした不安が軽くなり、現状をプラスに捉えようとする連想項目も多く見受けられるように変化していた。外国人留學生が抱えている不安の内容が具体的に語られれば、それに対して適切な支援策を打ち立てることができる。外国人留學生が自分の不安について語れる場を設ける等の支援が必要であろう。

二つ目は、研究活動やそれに関連する項目の重要度が高くなっていることである。研究活動と勉強に対する不安は3回の調査を通して最も重要度が高い項目だと判断されていたが、それに関連する項目や語りも多様な様相を見せていた。例えば、研究計画の立て方や日本語能力の向上等のような具体的な項目と結びつけて、不安を感じていることが分かった。日本人学生との交流が激減している中、日本語能力の問題と研究活動に対する不安が大きくなっているものと思われる。大学院生は誰もが研究活動に対する悩みや不安を持っているのだろう。文系や理系等の同分野の大学院生が集まって研究に対する悩みや不安を共有する交流会等、不安を共有する場を設ける支援が必要である。

三つ目は、人間関係の構築に対する不安は毎回の調査に出現していたが、より積極的に捉えようとする姿勢が見えるようになったことである。特に3回目の調査ではより積極的に人間関係を構築しようとしている姿勢が見られたが、徐々に留學生活に自信を持つようになり、前向きに捉えるようになったものと考えられる。日本人学生や留學生同士の学術交流会を

開催する等、持続可能な支援が必要であろう。

6. まとめと今後の課題

本研究は COVID-19 によって留學生が感じる不安を縦断的な調査を通して可視化した点で独創的な研究であり、日本語教育現場に応用できる示唆をもたらしたものであると言える。本研究では文系大学院に在籍している 3 名の外国人留學生が COVID-19 の影響を受けてどのような不安を感じているかについて 2 年間にわたって 3 回のインタビュー調査を実施し PAC 分析を行った。COVID-19 によるパンデミックは日本国内外の外国人留學生にも大きな影響を与えたが、パンデミックが収束した今もお様々な心配や不安は続いている。3 名の被験者の縦断的調査から明らかになった不安や心配を和らげるための積極的な支援策を打ち立てることが重要である。例えば、一人暮らしに対する不安や対人関係の構築に対する不安を和らげるための交流会の開催や、研究活動を支援するための共同研究の提案等が考えられる。

2023 年度からはオンライン授業から対面授業に切り替えられ、パンデミック前に戻りつつある。それに伴って多くの外国人留學生はまた新たな局面を迎えている。オンラインから対面に切り替わったことによる不安、COVID-19 後の変化についても追跡調査が必要であろう。今後も外国人留學生の不安に関する研究を継続していきたい。

付記

本研究は名古屋大学アジア共創教育研究機構の融合プロジェクトの研究助成を受けて実施した研究成果の一部をまとめたものである。

謝辞

本研究の調査に協力してくださった 6 名の被験者の皆さん、調査の実施し分析に多大な助力をくださった名古屋大学人文学研究科の孫芳兵さん、謝カン月さん、朱雅蘭さんに心から感謝申し上げます。

参考文献

- 殷梦茜・青木紀久代 (2017) 「在日中国人留学生の異文化適応に関する質的研究」『お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要』19、49-59
- 許倩・松田英子 (2016) 「在日中国人留学生の異文化適応支援の現状と問題—異文化ストレス、留学生のパーソナリティからの分析」『東洋大学大学院紀要』53、63-76
- 久野弓枝 (2011) 「留学生が抱える不安や問題とそのサポートについて—札幌大学の留学生に対する質問紙調査とインタビュー報告—」『札幌大学総合論叢』31、55-74
- 高久孝幸 (2021) 「コロナ時代におけるオンライン授業で見えてきた留学生の不安—留学生を支えるための支援教育のあり方—」『帝京平成大学紀要』32、339-348
- 田中希穂・大谷和大・近藤佐知彦 (2012) 「留学生の日本への適応に関する検討—主観的ウェルビーイングの変化」『多文化社会と留学生交流大阪大学国際教育交流センター研究論集』16、13-17
- 土田義郎. PAC-Assist2
<http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm> (2023年10月30日最終確認)
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 濱名篤 (2021) 「コロナ禍における学生の不安と支援のあり方—安全対策以上に求められる安心対策— 学生の実態状況調査」『リクルートカレッジマネジメント』39 (2)、30-33
- 平瀬清・草野勝彦 (2004) 「留学生が抱く不安と不安解消のためのサポート・システムに関する研究」『宮崎大学教育文化学部紀要』11、131-141
- 深堀元文 (2007) 『イラスト図解 心理学のすべてがわかる本』日本実業出版社
- 許明子・李嘉隆・謝カン月 (2022) 「COVID-19の影響による外国人留学生の不安に関する一考察」『日本語・日本文化論叢集』第29号、1-23
- 許明子・孫芳兵・謝カン月・西澤萌希・朱雅蘭 (2023) 「コロナ禍における日本語学習者の心理的不安の変化—来日前と来日後のPAC分析による調査を通して—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.29、No.2、73-74
- 吉村晋平 (2017) 「心理学に基づく“不安”との付き合い方」『追手門学院大学地域

支援心理研究センター紀要』14号、9-15

柳佳慶・松田英子（2011）「在日中国人留学生のストレスと異文化適応に関する研究—文化受容態度と自己効力感からの分析」『情報と社会』21、151-160